

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：38001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770211

研究課題名(和文)近世琉球の流動的身分に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Research on the Fluidity of the Hierarchical Society of the Ryukyu Kingdom in the Early Modern Period

研究代表者

山田 浩世(YAMADA, Kousei)

沖縄国際大学・地域文化研究科・研究員

研究者番号：00626046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世琉球を構成した基層的な社会制度である身分制のありように着目し、従来議論されてきた家譜を所持するか否かを特徴とする「士(サムレー)」(系持ち)と「農」(無系)による二大身分の強固な制度像の再検討を試みた。近世中後期において琉球内では、海運業者・医師・庖丁人などの技能者や献金を行い王府へ特段の貢献を果たした者が、その功績をもって士へと編入される例が散見され、身分変更が王府の運営と密接に結びついていたことが明らかとなった。近世琉球における身分制の運用には、柔軟な国家運営を可能とするため身分変更が結びつけられ、それを可能とするような流動的身分状況が広がっていたことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research enquires into the reality of the Hierarchical System of the Ryukyu Kingdom. It is aimed at reexamining the mainstream approach that focuses on the possession of kafu, the official recognition of the clan history, as the major criterion of the class division. Such a perspective leads to the image of a dichotomous and monolithic society, consisting of two rigid and hereditary classes; the nobility or Samuree, consisting of the clans with kafu, and the commoners or those without kafu. The finding of the research is that the alteration of individuals' social positions in the Ryukyu is closely associated to the administration of the Kingdom, as there are a considerable number of cases of integrations into the nobility of skilled individuals such as seafarers. This suggests that the management of the hierarchical system of the Ryukyu is characterized by a certain degree of fluidity, which enabled the alteration of the class for a flexible administration of the kingdom.

研究分野：人文

キーワード：近世琉球 身分制 官僚制 家譜

1. 研究開始当初の背景

近年、近世琉球(1609~1879年)については、「小国」として「大国」である中国・日本の双方に従属しつつ、独自の国家運営を進めていたことが明らかになりつつある。また、変化する国際環境の影響を受けてきた沖縄の歴史問題がクローズアップされるなかで、対外関係的な研究による琉球国の追求も深化を遂げてきた。それは例えば、支配・被支配という単純な理解に基づく関係を問い直そうと、琉球側が双方への従属(両属)を積極的に展開していたとする豊見山和行(『琉球王国の外交と王権』、吉川弘文館、2004)の議論や漂流・漂着という突発的な事件への対応から三国の複雑な関係性を描く渡辺美季(『近世琉球と中日関係』、吉川弘文館、2012)の研究などを挙げることができ、これらは対外的な関係のありようから、琉球が如何に「主体的存在」であったのかを明らかにしようとする研究でもあった。

その背景には、近代以降の歩みの中で「琉球処分」や「祖国」復帰などを経て日本へと編入された経緯を持つ沖縄において、琉球の歴史的位置づけについて常に「外」からどのように位置づけられてきたのかといった問いが強調されることで、対外的なありようを重視する研究状況を形成してきたと言える。このように日本・中国との対外的な関係を重視する研究状況に対し、近年では、より多面的かつ重層的な琉球の歴史的地位を捉える必要性が高まっている。

それは例えば、自らを「小国」と規定した琉球が、どのような工夫のもとで国家を営んでいたのか。対外関係研究の蓄積を踏まえながら、明らかにされてきた「外」とのありように整合する国家存立のための内的システムの解明が必要となってきたのである。

前近代の身分制について、近世琉球研究においては、家譜の作成・更新を王府が許可することを通じて、家譜を基準とする身分制度が成立していたことが特徴として挙げられてきた(田名真之『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社、1992)。また、身分とは一般に秩序・体制の維持のために人為的に創作された尊卑上下の観念をとともなう社会的な地位と解説され、長らく日本史研究の重要な研究テーマとして発展してきた。

日本史研究では、1980年代以降、江戸時代の「士農工商」といった強固な身分制のイメージが、近代以降に強調されたものであることが明らかにされ、社会集団としての身分のあり方を問う研究が進められてきた(朝尾直弘「近世の身分制と賤民」『都市と近世社会を考える』朝日新聞社、1995)。

このように身分を集団として捉える研究が進められると、「士農工商」といった公儀身分に収まらないさまざまな身分集団=身分的周縁論(塚田孝ほか編『身分的周縁』部落問題研究所、1994)の存在にも注目が集まり、近世日本社会を構成した多様な身分集団

と国家(幕府や藩)の関係が明らかにされてきている。この他、集団に基づくものとは異なる個人レベルで展開した問題も明らかにされるようにもなった。例えば、個人が身分の上昇や移動を願い、商人から士分格へと身分の移動を許可される事例など、集団にのみ帰属しない多様な身分のありようを明らかにする研究も提示されている(深谷克己『江戸時代の身分願望』吉川弘文館、2006)。日本史研究における身分への理解は、強固で階級的なイメージから、社会を構成する集団や個人のあり方に沿って存在する多様なイメージへと大きく変化してきているのである。

一方、琉球史研究においては、家譜を所持しているか否かを身分指標とする身分制が、17世紀後半の系図座の設置を契機として成立し、その後は両先島(八重山・宮古)への制度的拡大を経て、琉球全体が(「系持ち」か「無系」かという)二大身分に峻別される社会になったことが明らかにされている。この王府公認の家譜を所持するか否かという、一見明確な基準が示されたことや対外的な研究課題が優先される研究状況から、琉球の身分制は日本の従来の身分制と同様に厳格で強固なものとしてイメージされ、現在に到っている。

これに対し研究代表者は、近世琉球を支える国内官僚制度がいかなる論理によって運営されていたのかを検討し(拙稿「近世琉球における渡唐役者と船間割当」『日本歴史』757号、2011)、例えば、中国へと赴く「才府」という役職が王府の中枢部局の官僚層から選出されるとともに外交・貿易を司る重要な役職として存在し、帰国すればその報酬として土地(地頭所)の領有などとともに家格の上昇が認められていたことを論じている(拙稿「才府と王府官人制度に関する覚書」『チーシンブー』6号、久米崇聖会、2013予定)。奉公に対する報酬として身分(内)上昇が取り扱われた背景には、近世琉球における士(サムレー)の権益が、相続の際に功績を積んでいなければ漸次減少(維持が難しくなる)という原則をもっていたことが関係し、身分を維持すること自体が非常に難しい制度設計となっていたことが窺えたからである。琉球では身分の移動が可能である一方で、容易に降下してしまうという独特の流動的なありようを備えていたことを特徴としていたのである。

2. 研究の目的

このように近世琉球の社会設計およびそれに基づく身分制が、非常に流動的であった可能性に着目し、これまで十分に検討されてこなかった問題について検討を行うことを本研究の目標とした。例えば、町方に居住した医者や料理人、細工人といった諸職及び海運業者の人々が家譜などの記載から頻りに身分移動していた事例が確認されることや、功績を上げた者の家格(筋目)の変更といっ

た身分内における上昇の問題、町方有力者の献金による土籍への編入なども同じく身分内外における移動の事例と言え、これらの検討を通じて流動的な身分状況の検討を行うことで、近世琉球社会および国家運営の特質の解明を目指した。また、身分移動については、上昇の側面のみならず、困窮した者が地方へ住み着き家譜の更新が絶たれて土身分を失う屋取り（ヤードゥイ）の事例なども検討の対象に含め、広範な社会の人的流動性の検討を行うことで、より実態的かつ総体的な動向の把握を目指した。

述べたような問題を検討することを通じて、本研究では近世琉球における身分制がどのように機能していたのかを検証するとともに流動的な身分制の運用実態をこれまでにないレベルで実証的かつ構造的に解明すること、それらを日本や中国における身分制と比較することで東アジア世界における身分研究を進展させること、そこからこれら流動的なあり方が、陸域資源の乏しい「小国」琉球の柔軟な人材登用と国家制度の運用を支え、厳しい外交環境の中で生き残るための内的システムの一つとして機能していたことを明らかにすることを目標とした。

3. 研究の方法

本研究では、近世琉球における身分のありように着目し、関連する史料の収集調査、及び身分の流動的なありかたの実態的解明を目指した研究会を開き、既存研究の再検証と新たな事例の蓄積を進めた。史料の収集および研究の組織的展開のため、調査地と緊密なネットワークを築いてきた地元研究者（金城善・得能壽美・宮良芳和・伊知地裕仁）や日本史・東洋史・民俗学の研究者（伊藤陽寿・須田努・大里知子・高江洲昌哉・上原兼善・麻生伸一・富田千夏・輝晶子・玉城毅）の協力を得ながら、研究を展開した。史料調査については、近年公開された尚家文書、沖縄戦を逃れた八重山及び久米島、沖縄島北部の史料群、県外に残存した沖縄関係史料の収集を行い、基礎的な研究史料の集積を図りつつ、制度実態の解明を進めた。また、各研究者の参加を得ながら「琉球身分制研究報告会」を実施し、成果発表および既存研究の再検証、理論化などを進め、あわせて近世日本及び中国における制度（観念）との比較研究の視点について議論した。

4. 研究成果

本研究の柱は、関連史料の網羅的収集および研究会を通じた既存研究成果の集積および再検討、さらに収集した史料を踏まえた新たな「流動的身分状況論」の構築であった。史料調査では、石垣市立八重山博物館に収蔵されている八重山系家譜の収集、多良間島に伝存していた家譜及び関連資料の収集・撮影を行った。また、那覇市歴史博物館に所蔵されている尚家文書中の庖丁人や海運業

者・医師などに関わる史料の収集を進めた。このほか、久米島博物館でも役人たちの勤務記録である「勤書」の収集、宜野座村立博物館所蔵の諸家譜および関連史料の撮影などを行い、近世琉球を支えた広範な地域、人々の記録の収集に努めた。また、県外では東京都立中央図書館に所蔵されていた『琉球学制文事資料』の収集を行った。

これら広範な史料調査の展開により、近世琉球の展開を支えた人々の総体的な動向の把握が可能になるとともに、以下記載する研究会での討議などを経て本研究の検討課題の深化が促された。

研究会（琉球身分制研究報告会）は、研究期間内で全五回の開催を持ち、研究代表が報告しより高次の研究視点の獲得および本研究の進展を目指すとともに、多くの研究者と議論を共有することで、これまでに蓄積されてきた研究成果をあらためて検証し着実な研究の蓄積と進展を目的に進めた。大まかな経過および明らかにされた論点は以下の通りである。

第一回の報告会では、山田浩世（近世琉球における王府官人制度の運用論理と才府身分（内）上昇に注目して）、伊藤陽寿（日本史・中国史からみた琉球の「身分制」

「御庖丁人江新家譜被下候僉議拔（1762～1857年）」の講読を通じて）、得能壽美（描かれた身分制 八重山蔵元絵師画稿絵引）

玉城毅（19世紀末琉球における王府組織を生きた平士）、金城善（『久米具志川間切西銘村名寄帳』に記された人名および肩書きから見た身分）からの研究報告を得た。研究代表から、琉球内での身分（内を含め）変更が王府の官僚制度や「国用」のありようと深く関わっていること、身分制が広範な領域と連動していることを提示しつつ、より実態的な把握の必要性を指摘した。一方で、琉球の身分制を論じる際の前提として、同時代の日本における身分制の仕組みや機能についての議論の必要性、両先島における身分制を沖縄島における身分制と比較した際の位置づけを議論する必要性などが指摘された。

そこで第二回の報告会では、得能壽美（琉球王国身分制の先島における展開）、山田浩世（八重山における官人制度と身分制についての知識整理）、平良勝保（宮古島の家譜にみる「相続」と「継子」位牌祭奠継承者の死亡と「継子」訴えまでの期間を考える）、金城善（八重山島石垣間切石垣村の『頭数帳』に見る石垣村のユカラピトゥ（土族）とブザ（百姓））、宮良芳和（四か村に見る身分制の痕跡）の報告を得て、第一回で問題となった両先島における身分制の問題について集中的に討議を行った。

得能・山田報告により、これまでの八重山にかかわる身分制の先行研究を押さえながら諸問題及び展望（家譜の成立以前の状況、家譜成立後の八重山土族の位置づけ、身分制における女性、八重山における官人制度と身

分、八重山における科と役人登用)を整理しつつ、流動的な社会設計に基づく身分変更が八重山でも確認されるのかについて検討した。平良報告では、宮古における「預かり位牌」となっている位牌を「継子」が引き継ぐ例が報告され、位牌の相続に連動して家譜(土であることを証明するもの=討議では日本史における「株」のような側面もみられるとの指摘)も相続され、その上で過去に積み上げられた先祖の功績も引き継がれていた可能性が指摘され、琉球社会における身分をどのように捉えるかが改めて問題とされ、家産的な存在として家譜(先祖の功績)を捉える可能性も指摘された。

報告会では、両先島において百姓層からの功績による身分変更や土族でも上納などを延滞する「放埒之者」は百姓へと「貶める」といった規定など、身分が流動的に変更された可能性を想起させる(規模帳内の)条項の存在は提示されたものの、その実態的な把握が課題として挙げた。また、八重山における身分制は、沖縄島で展開した身分制に比べ、(とりわけ農土への)流動性が低い社会体制が構築されていたのではないかという作業仮説も提示され、今後あらためて「家譜」や「勤書」、ヤードイ(屋取り・居住人)の問題などを含め検討していく必要性が明らかとなった。

第三回の報告会では、富田千夏(五主・船頭から見える琉球の身分制)、輝晶子(琉球社会における医者の上昇・昇位と身分の上昇)、矢野美沙子(科試からみる役人の身分(内)上昇)、麻生伸一(近世那覇の社会構造試論-人口流入と管理統制から考える-)、平川信行(近世琉球期肖像画に描かれた衣装に見る身分の表象)らによる報告を得て、本科研の研究キーワードである「流動的身分状況」を象徴する海運従事者(五主・船頭)や医師からの身分変更の問題などが検討された。多くの船旅・貿易従事経験を持つ五主(貿易従事者)や医道稽古などを経て活躍した医師は、王府が実施する事業(進貢・医業)に必要な人材と見なされ、功績が認められるなかで家譜の作成を許可されて土籍へとぼっていたことが明らかとなった。また、その人々の中には王府への資金提供によって土籍へのぼる者もあり、身分間をさまざまな経緯をもちながら人々が移動していたことがあらためて整理された。また、富田・輝報告を通じて、功績などによる身分変更の展開過程について、王府が必要とする人材・能力の徴発を目的に徐々に役職や機関が王府内で設定され、一定の昇進の規定化(慣習化)が進みつつ展開することで広範な人材が登用されていたことが指摘された。第一回で報告のあった庖丁人なども類似した問題の中にあつたものと考えられ、技能者と身分制の展開が近世琉球の運営に重要な意味を持っていたことが示唆された。矢野報告では、琉球の状況を踏まえつつ近世日本

における「土」(侍)の身分の位置づけや身上がりをどのように捉えるべきかについて報告がなされ、近世日本においても身分内上昇として大名層の官位授与(大名間序列に關係)の問題があること、金銭によって武士身分または武士身分に近い資格を得る売禄や幕府による学問奨励の一環で実施された学問吟味などの存在が指摘された。特に近世日本における土は、文武の要素を持つ「侍」であり、身上がりしたものは土としての「格」を満たしつつも「職責」を満たさないマージナルな存在であることが整理され、民衆の身上がり願望に応えることが社会の安定化を計る施策の一環であったことが指摘された。沖縄島における身分制及び王府施策、広く見れば社会そのものが、本科研の想定する「流動的身分状況」と深く結びつきながら展開していた可能性が参加者間で議論され、共有化された。

第四回では、第二回の報告会で明らかになった宮古・八重山における身分制・社会制度が、沖縄島のそれに比べて「固定的」(=身分移動が非常に稀)とみなされる点をあらためて議論した。金城善氏(「宮古・八重山の系持ちの元祖と別有家譜」)、新城敏男(八重山土族と上国学問稽古)、得能壽美氏(八重山の身分と諸職-土の嗜みと百姓の細工-)、山田浩世(宮古における身分制と身分変更・上昇)の報告を得て、議論の深化を図った。特に、既存研究の整理の中で、宮古・八重山で固定的な身分状況の出現が指摘されてきたが、近世末期の宮古島で見られた例えば、洲鎌村の福原の事例を含め1856年以後に登場した造営(御用布御蔵の再建)・奉始・捧銭(銭10万貫の献納)氏などの存在から、困窮する島政の立て直しに身分変更を報酬として結びつけた施策が展開された可能性が明らかとなり、近世琉球内においても多様な身分制の運用実態が存在した可能性が明らかにされた。

第五回では、これまでの研究会における成果を整理するとともに、須田努(薩摩の近代移行期「苗代川人」という身分の解体-朝鮮由来の異邦人)たちの明治維新)、高江洲昌哉(「流動的身分論」のセカンドステージのために-沖縄近代史からの問題提起)、金城善(戸籍制度の変遷と多良間島の『惣頭帳』土と百姓、土族と平民)、玉城毅(身分・階層と沖縄の伝統文化の形成:権力の効果としての門中・家・兄弟)の報告を得つつ、近世から近代へと移り変わる時代に表出した身分を巡る問題を取り上げることで、より多面的に身分制度像の解明を図った。

以上のように本研究では、史料調査および積極的な研究会の開催し、作業仮説として提起した「流動的身分状況」の検討を通じてより実態的に琉球社会の展開状況を把握するための新たな視点の確立が図られた。とりわけ、日中双方の異なる支配秩序に整合的に対応しながら近世琉球の展開を支えた官僚層

が、公的な認可のもとに作成されていた家譜の所持を身分指標とした士(サムレ)層によって形成される一方、献納によって土籍を与えられた者や王府の必要とした諸技能(庖丁人・医師・海運業者・細工人など)によって土籍を与えられた者が近世中後期以降多数生みだされたこと、また一方で家譜を持ちつつも十分な功績が挙げられずに逼迫し屋取り(寄留して農業を営むもの)する者が数多く存在したことなどの例を検討しながら、琉球身分制の特質として身分移動が「制度的」に頻繁に発生する「流動的身分状況」が背景に影響していたこと、またそれが近世琉球社会の展開に大きな影響を与えていたことを明らかにした。また、「流動的身分状況」の展開は、近世琉球の国家運営においては「国用」(国家の益)に叶う柔軟な人材確保に作用し、それが複雑な国際環境に置かれた近世琉球の外交・内政の整合的かつ十全的な展開を支える原動力ともなっていたことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

山田浩世「18世紀末の琉球における風水再導入(学習)問題について - 『琉球学制文事資料』に見る布達と勤学・神山里之子親雲上の事例を中心に - 」『トランスナショナルな文化伝播』、琉球中国国際関係学術会議、査読無、1巻、2015、111 - 120

山田浩世「近世久米村における科試 - 『琉球学制文事資料』の検討を中心に」『万国津梁-東亜視域中的琉球』、中琉文化経済協会、査読有、14巻、2015、87-114

山田浩世「近世後期の久米村官人制度における渡唐役と地頭所下賜」『越境する東アジア島嶼世界 第15回琉中歴史関係学術研究会論文集』、琉球大学国際沖縄研究所、査読有、15巻、2016、299-316

[学会発表](計 6件)

山田浩世「近世琉球における王府官人制度の運用論理と才府 身分変化に注目して」、『第一回琉球身分制研究報告会、於沖縄県立博物館・美術館、2014年6月28日

山田浩世「久米村における科試の実施過程」『琉球学制文事資料』中の文組寄役科の検討を中心に、沖縄文化協会2014年度公開研究発表会、琉球大学、2014年7月20日

山田浩世「久米村土族としての生き方と琉球王国」、『シンポジウム琉球の海外交易と久米村、沖縄県立博物館・美術館、2014年9月13日

山田浩世「八重山における官人制度と身分制」、『第二回琉球身分制研究報告会、大濱信泉記念館研修室、2014年9月15日

山田浩世「18世紀末の琉球における風水再導入(学習)問題について」『琉球学制文事資料』に見る布達と「勤学」神山里之子親雲上の事例を中心に、琉球大学法文学部・台湾大学文学院国際学術交流シンポジウム、琉球大学五十周年記念会館、2014年12月14日

山田浩世「宮古における身分制と身分変更・上昇」、『第四回琉球身分制研究報告会』、於沖縄県立博物館・美術館、2016年2月6日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 浩世 (YAMADA, Kousei)
沖縄国際大学 地域文化研究科 研究員
研究者番号: 00626046